５．若者へのメッセージ

難しい時代ではあるが、希望はある

阿部憲政氏の人材育成をとおした産地への貢献は、最近はじまった話ではない。若い頃から「今治タオル技能士会」の主要メンバーとして時間を惜しまず積み重ねられてきたものである。

かつて技能士会は、国家技能検定１級取得者のみを構成員としていたが、現在は２級取得者や資格なしでも加盟できる。加盟条件を変えた理由は、産地が縮小しタオルづくりの担い手が少なくなっているからであり、少しでも多くの若者がタオルづくりの技術を継承し、産地の発展のために活躍してくれることを願っている。

タオルメーカーが減少している現在、タオル生産量が右肩上がりだった時代に比べると、希望をもってタオル業界で働くことは難しくなったかもしれない。それでも今治のために、タオルのために働く若い世代もいる。阿部氏の長男と次男がそうであり、かれらは阿部春工場のみならず、日本のタオル工業の次世代の担い手でもある。また、長女は、本業である農業の傍ら、阿部春工場の経理を担当し、陰ながらタオルづくりを支えている。

６．座右の銘

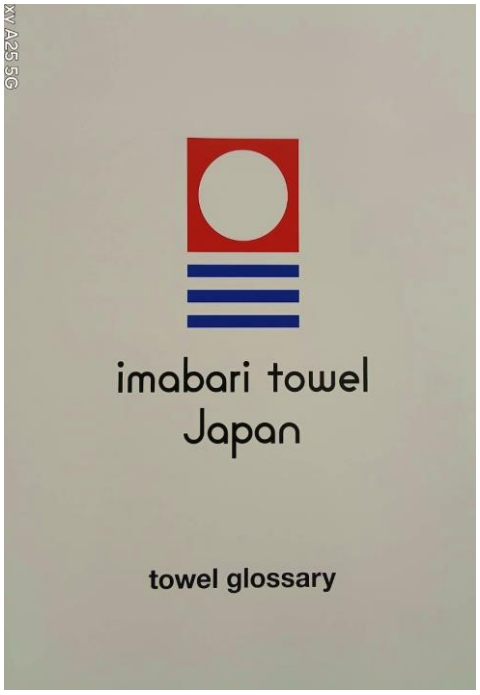
「生涯現役」、これに尽きる

阿部氏の座右の銘は「生涯現役」である。阿部春工場の創業者であり阿部氏にタオルづくりの道へ導いた父親の春男氏も、生涯現役でタオルをつくりつづけた人である。父親から受け継いだタオル工場を守り、また発展させることが阿部氏の使命であり、そのバトンをいま息子たちに渡そうとしている。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

およそ60年もの間、タオルと真剣に向き合う日々が阿部氏の生きる糧となり、「何より元気でタオルを織りつづける毎日が幸せだ」と阿部氏は言う。阿部氏に「タオルとは何か？」と質問を投げかけたところ、阿部氏は少し考えたあとで「タオルはぼくの生きがいやね」と語ってくれた。

ここで、阿部氏に関連する３冊の本を紹介しておこう。まず、『タオル用語事典』（今治タオル工業組合、2019年）である。阿部氏が監修を務め、産地の技術の標準化と継承を目的に作成されたものである。24年ぶりに改訂され、内容もさらに広く深く掘り下げられている。



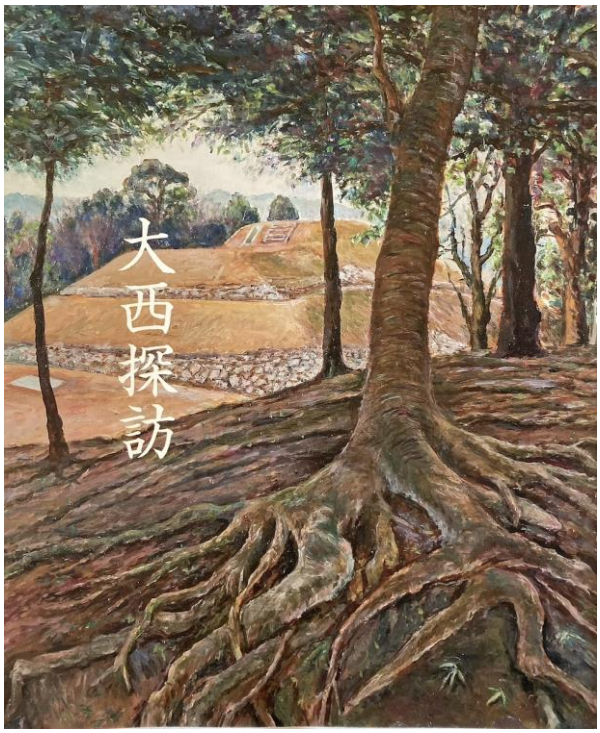
今治タオル工業組合編集『タオル用語事典（タオル技術情報解説集）』
今治タオル工業組合、2019年。

つぎに、「大西探訪」（「大西探訪」編集委員会編、がんばる地域活性化推進協議会連合体、2015年３月）である。タイトルから想像できるように、大西町の名所や歴史、産業などを紹介した雑誌であ

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

る。大西町は1955年に越智郡の大井村と小西村が合併して誕生し、双方の村名から一文字をとって大西町となった。そして、2005年1月に大西町とその周辺地域が合併して越智郡から現在の今治市になったが、古い歴史をもつ地域だけにいまでも９つの集落にわかれ、それぞれに独自の歴史建造物や遺産がある。９つとは、九王（くおう）、紺原（こんばら）、新町、大井浜、宮脇、脇、山之内、星浦（ほしのうら）、別府（べふ）である。

阿部春工場のある集落は宮脇であり、阿部氏が世話役を務める大井八幡大神社（創建 702年）は、宮脇と新町と大井浜の氏神で、なんといっても幅 3.6メートルほどある１本石（御影石）を使った石段（85段）が有名である。毎年５月に開催される春祭りには継獅子（つぎじし）がおこなわれ、阿部氏や息子たちも幼少のころに獅子や奴を演じ、大役を果たした。



「大西探訪」編集委員会編「大西探訪」

がんばる地域活性化推進協議会連合体、2015年３月。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

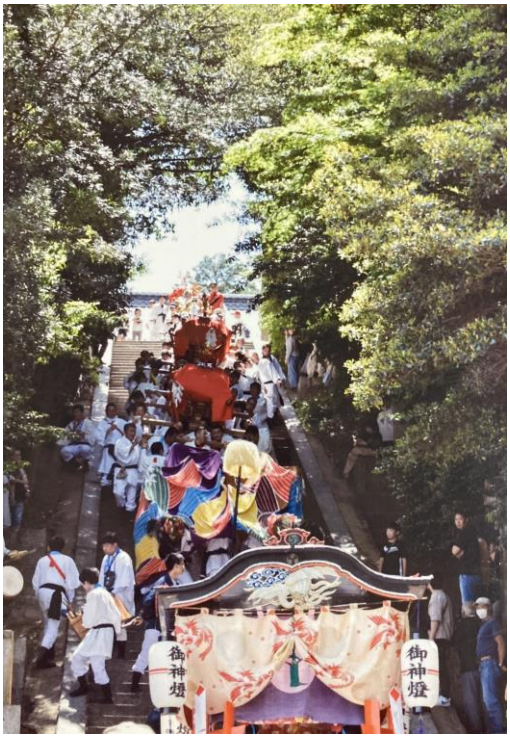
大西町の産業

【大西町の造船業】

【大西町のタオル産業】

【大西町のみかん栽培】

「大西探訪」にて阿部春工場が紹介されたページ（「大西探訪」、38-39頁）



毎年５月に開催される春祭りにて地元の人たちが

継獅子を担いで石段を降りていく様子（左）

担ぎ手たちとの記念写真にて中央におさまる阿部憲政氏（右）

（写真提供：阿部憲政氏）

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

大西町のおもな産業は、タオル工業と造船業とみかん栽培である。阿部春工場のある宮脇は、今治の綿織物業の歴史と深いかかわりがあり、今治で最初に綿ネル製造に着手した矢野七三郎（1855-1889）の生まれ故郷である。大井八幡神の大鳥居の近くに生家があったとされている（阿部克之「矢野七三郎　聖夜の惨劇：今治綿業の先覚者たち」、109頁［阿部克之編『どんどび』４号、呑吐樋文芸会、2000年５月、104-131頁］）。

矢野七三郎は、明治期に入り江戸時代中頃から生産されていた小幅の白木綿（伊予木綿）の衰微を目の当たりにし、伊予木綿に代わる製品の模索をはじめた。そして、紀州に赴いて綿ネル生産の技術を学び、帰今して紀州綿ネルの「平織り両毛ネル」とは異なる「三つ綾織り片毛ネル」を考案して差別化を図った。これが大いに売れ今治綿業発展の礎となったため、矢野七三郎が「今治綿業の父」と呼ばれるようになった。阿部氏は、「自分とおなじ宮脇で矢野七三郎が生まれ育ったこと」を誇りにおもっている。

矢野七三郎の生誕地として今治の綿織物業にゆかりのある大西町では、かつて30軒ほどのタオルメーカーがあり、造船よりもタオルで生計を立てる人が多かった。しかし現在は、阿部春工場、菅英紋織（株）、新居田物産（株）の３軒となった。

「今治タオル　買っちゃった」

最後は本ではないが、ある研究ノートを紹介しよう。研究ノートにつけられたタイトルは「今治タオル　買っちゃった」である。作成者は、愛媛県立今治北高等学校３年生だった長女の真衣氏とチームメートの６名である。この研究ノートは、「平成８年度 **全国高等学校生徒商業研究発表大会** 」に向けて準備されたものであり、真衣氏とチームメイトが今治タオルについて研究し、その内容をまとめたものである。

「今治タオル　買っちゃった」の目次は、以下のとおりである。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

Ⅰ．研究の動機
Ⅱ．今治タオルの生産と現状
Ⅲ．タオルの消費動向調査
Ⅳ．自然農法等による販売方法の実現
Ⅴ．ブランド
Ⅵ．今治タオル企業の対応
Ⅶ．結論

今治タオル工業について統計やデータを駆使しながら現状を分析し、そのうえでブランド化に向けた提案をおこなっている。

全国高等学校生徒商業研究発表大会に向けて、なぜこのようなテーマが選択されたのか？ 話は一年前に遡る。真衣氏とチームメートは、前年度もおなじ大会にエントリーし、「椀舟と月賦販売」というテーマのもとで、日本初の月賦販売によって椀舟行商をおこなった今治の桜井漆器について研究した。その内容が高く評価され、北海道函館市で開催される全国大会への切符を手に入れた。

チームメイトや引率教員らと一緒に函館市内のホテルに前泊したところ、真衣氏は旅館に置いてあったタオルが阿部春工場でつくられたものだと気づいた。タオルには「今治」の文字も、ましてや「阿部春工場」の文字もない。ホテルの従業員に聞いてみたが、かれらもどこでつくられているか知らなかった。しかし、真衣氏は、父親の働く姿を毎日みているため、このタオルが父のつくったものだとすぐにわかった。タオル工場の娘として生まれたものの、それまでタオルにまったく興味がなかったが、運命的なものを感じた。そして、真衣氏は、改めて父親の仕事について調べてみようと思った。これが「今治タオル 買っちゃった」に至る経緯である。

「今治タオル 買っちゃた」の結論部分では、今治タオルのみならず、今治の地域活性化についても言及している。今治北高校の先輩であり、マラソンランナーだった**真木和**（いずみ）氏を引き合いに出し、

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

「・・・真木和さんは、現在日本を代表する選手として活躍されているが、高校時代は県下でトップではなかったようだ。しかし高校卒業後、現在の会社で能力を発揮され、前回のバルセロナオリンピックでは１万メートル、そして今回のアトランタオリンピックではマラソンでの出場となった。アトランタでゴールするまで、どの競技においても、大変な努力をされてきたはずである。・・・」として、真木氏と今治タオル、そして今治市を重ね合わせ、これからの努力で今治タオルは「魅力的なブランド」になると結論づけている。そして、「全国のみなさんに『今治タオル 買っちゃった』といっていただくために、私達も努力していきたい」と締め括られている。実際のところ、真衣氏は現在阿部春工場の経理をしており、今治タオル工業の存続・発展に小さいながらも寄与している。

多彩な趣味と多彩な顔

阿部氏は、タオルづくりで忙しい合間を縫って、趣味にも興じてきた。10代後半ではじめた写真やアマチュア無線にくわえ、30代で新たにはじめたのが鉄砲と船である。自宅や工場のある大西町宮脇はイノシシやハクビシンなど山野獣が頻繁に出没するため、その駆除も兼ねて1984年に狩猟免許を取得した。また、1988年には小型船舶操縦免許をとって、時間があれば海釣りに行くようになった。ここで終わらないのが阿部氏である。漁業組合に加盟して漁業権を獲得し、漁業組合の役員も務めている。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

阿部克行「矢野七三郎 聖夜の惨劇：今治綿業の先覚者たち」阿部克之編『どんどび』４号、呑吐樋文芸会、2000年５月、104-131

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

頁。
「大西探訪」編集委員会編「大西探訪」がんばる地域活性化推進協議会連合体、2015年３月。
大西中学校創立50周年記念事業実行委員会編『今治市立大西中学校 創立50周年記念誌』、原印刷、2012年。

編集後記

阿部憲政さんは稀代きっての世話好きです。どんなに忙しくても、他人のためにせっせと体が動きます。これは、タオルに対しても地域のことでも変わりません。

阿部さんは、今治タオル工業組合の理事や「今治タオル技能士会」の主要メンバーとして長年活動されてきました。こうした同業者団体は、零細・中小規模の企業が集積して形成される産業だからこそ、重要な意義をもちます。それは、零細・中小企業のもつ経営資源が限られているからです。阿部さんは、産地における阿部春工場の役割、そして産地あっての阿部春工場を十分に理解されており、半世紀以上磨いてきたみずからの技術をオープンにし、誰もが自由に技術を学べる環境を整えました。

日常業務に組合活動に多忙の毎日ですが、生まれ育った大西町の地域活動にも熱心にとり組まれています。702年に創建された大井八幡神社の世話人、越智町商工会の理事や同会青色申告会の会長、民生員（12年間）と挙げれば両手では足りません。

技術革新のスピードが加速し時代の変化が激しい時代に、わたしのような自分のことで精一杯の人間にはとうてい真似できません。頭が下がる思いです。阿部春工場がそうであるように、阿部さんの「世話をする」姿勢がいつの間にか周りを巻き込んで大きな渦となり、そこから生まれるパワーが何らかのかたちとなって阿部さんに返ってくるんだとおもいます。タオル業界でも後継者不足はたいへん深刻ですが、阿部春工場ではその心配はありません。家族でタッグを組み、家族の堅い絆で、創業100年を目指します。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の43人目は、染料メーカーの（株）ヤスハラで調合師を務める渡辺隆司氏である。ヤスハラの強みは「Color Matching」にあるが、これを具現化するのが調合師である。タオルに染色される色の調合・配合は調合師の腕にかかっている。次回の「タオルびと」では、調合師の仕事や渡辺氏のタオル人生について話をうかがう。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.